

ニューズレター

No.29

発行：水資源・環境学会 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 滋賀県立大学環境科学部気付 電話 0749-28-8278

<http://www.soc.nacsis.ac.jp/jawre/>

2002 年度水資源・環境学会研究大会のご案内

2002 年度研究大会を下記のように開催します。

〔研究大会〕テーマ：「人間生活と水」

前世紀も終わりを迎えるようになった頃から、21 世紀は水の世紀であるというフレーズを耳にするようになりました。地球上の人口が 60 億人に達し、さらに 1.5 倍ほど増大するであろうという予測が出ている中であって、水もまた地球的問題の一端を占めているのは疑いのないところでしょう。

本学会は、発足の当初からこうした事象を視野に入れ、グローバルとローカルという 2 つの位相を基軸においた水問題の把握を試みてきました。新しい世紀を迎えて一年を経過した今日、これまでの歩みを踏まえつつ、さらに時代の課題に取り組んでいきたいものと考えます。

今回は、人間生活と水の関わりに焦点をあて、さまざまな角度から問題の発掘や解明を行なっていくことを計画しています。問題の解明を踏まえた政策形成に関わる研究も、今回の大会で期待したいところです。

なお、上記テーマに関わる報告のほか、自由論題での報告も募集しています。報告を希望される方は、ファックスまたは電子メールで、報告者名、タイトル、および 400 字程度の要旨を下記応募先までお送りください。

水資源・環境学会研究大会事務局

〔大会会場〕：大学コンソーシアム京都（JR 京都駅から徒歩 3 分）

〔大会日時〕：6 月 1 日（土）午前 10 時 30 分～

〔プログラム委員長〕：板橋郁夫（本学会前会長）

〔応募締め切り〕：3 月 4 日（月）

〔発表原稿締め切り〕：5 月 20 日（月）

〔応募・問い合わせ先〕：秋山道雄（滋賀県立大学環境科学部）

〒522-8533 彦根市八坂町 2500

TEL 0749-28-8274 FAX 0749-28-8344

E-mail akiyama@ses.usp.ac.jp

2001 年度冬季研究会の案内 京都・伏見 名水が醸し出す香りと文化を訪ねる

冬季研究会は、学会趣旨の原点に立ち返り、名水といわれる水が生み出す生活と文化を探る、というコンセプトで企画し、水に対する感性を磨くことにしました。

今回は、良質で豊富な地下水ということから、かつて伏水と記された京都南部の伏見を訪ねてみたいと思います。

伏見が歴史に登場するのは、意外に古く日本書記に「俯見」と書かれ、朝廷とのかかわりが深い土地柄であったようです。今も湧き出る地下水は、灘の辛口・男酒に対して伏見の甘口・女酒、日本一の旨酒といわれた伏見の酒づくりの三条件「京の底冷え」「近江の酒米」「伏見の伏水」のひとつになっています。酒造地として知られている伏見は、古くは淀川・鴨川・桂川の三川を結ぶ水運や、水路と陸路の交通結節の要所であり、豊臣秀吉が築城した伏見城のあった城下町でした。近世には、参勤交代の本陣が連なる宿場町であり、坂本竜馬らが活動する拠点となり、鳥羽・伏見の戦いが起こるなど近代国家への胎動となった歴史舞台でした。現在の伏見は、歴史的な地名が残り、瓦屋根の民家や運河沿いに酒蔵が建ち並ぶ静かな風情ある町です。

研究会の参加を希望される方は、**2002年2月14日(木)**までに担当の若井まで、メールまたはファックスでご連絡ください。

日 時： 2002年3月9日(土) 午後1時30分 現地集合(近鉄電車「桃山御陵前駅改札口」)
午後5時 現地解散
(その後、伏見の銘酒を堪能する懇親会予定)

内 容： 御香宮神社にて湧水の現状と賞味(環境省「名水百選」指定)
造り酒屋見学とお酒の試飲
運河沿いの酒蔵のある風景鑑賞
旅籠「寺田屋」と旧遊郭の見学

問合せ先： 若井 郁次郎(大阪産業大学人間環境学部)
e-mail: wakai@due.osaka-sandai.ac.jp
fax: 072-871-1259

諫早干拓現地見学会報告

伊藤達也(金城学院大学)

1. 諫早干拓現地視察(1) - 8月26日午後1時~3時30分 -

26日は天気予報が完全に外れて快晴。暑い。いつもの見学会同様、関西、東京、名古屋、岡山、大分等、全国から参加者が集まり(数は少ないですが)、11時30分に無事、長崎空港を出発し、12時JR諫早

駅に到着。駅で待ち合わせた人たちと合流し、全員が予定通りの集合となりました(駅西口集合がなぜか東口に変更になったりしましたが)。今回の参加者は12名(ドタキャン3名)、これに案内の高村咲さん(諫早湾の干潟を守る長崎県共同センター代表)を含め、計13名のツアーでした。

昼食を本明川河畔の鰻や（薄味のおつゆ、鰻も薄かった？）でとった後、諫早市長田町の「みのり会館」（とても立派な建物で農水省の補助事業でできた建物）で高村さんから諫早干拓事業の経過と問題点についての説明を受けました。その後、諫早湾北側の高台に向かい、諫早干拓、潮受け堤防（高さ7m、長さ約7km）の全景を眺め、旧干拓地の先端、本明川河口の天狗鼻では、旧海岸堤防から目の前に広がる干拓予定地を見学。潮受け堤防ができ、あの「ギロチン」によって97年4月14日に諫早湾奥が閉め切られて4年、昨年あたりから堤防内の干陸化した干潟に急速な勢いで人の背丈ほどもある陸生植物（セイタカアワダチソウ等）が覆うようになったそうです。確かに目の前に広がる旧干潟は本や雑誌で見たあの干潟とはまったく異なるもので、人間の行為が自然を改変する凄まじさを見せつけてくれました。その後、内部堤防（南部堤防）、「防災」浚渫工事現場を見学し、諫早干拓事業によって多大の漁業被害を受けている有明町漁協（島原市の北隣、有明町にある漁協）に向かいました。

2. 有明漁協での聞き取り - 26日午後4時～6時 -

有明漁協では幹事の橋本さん、青壮年部の松本さん、宇土さん等から、漁業の現状と干拓事業の影響について、予定時間を大幅に超える丁寧でかつ有意義なお話をうかがうことができました。有明町の漁師の方はもっぱら渡り蟹漁によって生計を成り立たせていたのですが、諫早湾奥の閉め切りで有明海の潮流が大きく変わってしまい（流向の変化、潮流の弱化）、かつ、干潟面積の大幅な減少で、蟹漁が壊滅状況に陥っています。かつて蟹だけで年間700～800万円の水揚げがあった漁師の方が、今では年金の積み立てを崩しながら何とか生計を維持しており、一刻も早い潮受け堤防水門の開放、さらには堤防の中央部分を数キロにわたって開け、諫早湾奥の調整池内の干潟をよみがえらすことを大きな目標としています。

それにしても、話の中にでてくる農水省官僚、県等の自治体幹部、地域有力者たちの対応（干拓事業による漁業への影響はないと言ったり、問題があらわれても対応しなかったり等）は、日本の公共事業の最も悪い部分が集約的に出ている、と思わずにはいられないものでした。私自身、名古屋に住み、長良川河口堰問題等に関わっていますが、そこで見られる政府組織、地方政治、地域コミュニティの抱える問題とまったく同じ問題を諫早で見た気がします。

3. 諫早干拓現地視察（2） - 8月27日午前8時30分～10時

「諫早湾の干潮時の海の様子を見なければ、今回のツアーの意味はない」と言われ、前日の夜、割烹「ほうちょう」で食べた魚のおいしさ、お酒のおいしさがかすかに残る体を奮い立たせ（若干名は夜遅くの2軒めの飲み屋のお酒が体の中に深く残っていたみたいですが）、朝9時（ちょうど干潮の時間）に

諫早市北東に隣接する高来町金崎の北部排水門と潮受け堤防の外側に広がる干潟を見学しました。27日も天気予報は見事に外れて快晴。暑かった。

北部水門は南部水門と並んで潮受け堤防内調整池の排水機能を有する施設です。現在でも調整池の水位を保つために随時排水を実施しています。私たちは干潮時に行ったのですが、排水されているのかどうかは確認できませんでした。北部水門前の海岸には小さいながらも干潟が広がっており、ムツゴロウやトビハゼ、蟹にヤドカリが走り回ったり、飛び跳ねていました（最初、気がつかなかったのですが、実はうじゃうじゃ）。気がつく、一時間以上、海岸で遊んでいたことになり（高村さんの説明を聞き入っていた時間が長かったのです）。

4. 小長井漁協での聞き取り - 27日午前10時30分～12時 -

小長井漁協のある小長井町は諫早市の北東、佐賀県との県境にあり、諫早湾湾口に面しています。1960年頃から寿司ネタとして高く売れる二枚貝のタイラギ漁が盛んになり、1980年代～90年初期にかけては、「タイラギ漁で、半年は寝て暮らせる」ほどの水揚げ（1漁師当たり1500万～2000万円）があったそうです。それが干拓工事開始と同時にタイラギが激減し、1993年からは水揚げゼロが続いています。現在ではアサリで生計を立てたり、カキ養殖を手掛ける人も現れているそうです。小長井漁協では野田さん、新宮さんからお話をうかがいました。

私たちの聞き取り先に小長井漁協が選ばれた最大の理由は、現在、有明海に関わるほとんどの漁協や漁師の方が潮受け堤防水門の開放を求めているのに対して、小長井漁協を含め、北部水門に面する漁場を有するいくつかの漁協が水門開放の反対を唱えていることにあります。反対理由は、北部水門を開けることにより、調整池内の汚れた水が一挙に大量に諫早湾に流れ出し、水門に面した彼らの漁場が壊滅的な打撃を受ける点です。案内の高村さんも少し緊張した面持ちで、小長井漁協へは初めて訪れると言っていました。

私もそうした緊張感を共有しながら漁協を訪れたのですが、聞き取りはとてもアットホームでかつ丁寧な説明を受けることができました。昨日訪れた有明漁協でも感じたことなのですが、漁師の方は船底一枚で死と隣り合わせて生活しているので、気性が荒いと勝手に思っていた者からすると、有明海の漁師の方は信じられないくらい、穏やかな方ばかりでした。「海苔やアサリ等で生計を立てている漁師は、農民に近いから」と説明してくれる方もいたのですが、それだけでは説明しきれない気がします。やはり生活に豊かさがあったのではないのでしょうか。聞き取りの最後に、「水門開放には反対みたいですが、潮受け堤防の中央部を壊し、諫早湾奥・調整池内に大量の海水が出入りし、干潟が復活するようになれば、有明海はよくなるのでしょうか」といった趣旨の質問をすると、「そう思う。現在の水門開放には反

対だが、諫早干拓事業をやめ、堤防を大きく開けることは必要だ」という答えをいただくことができました。有明漁協の漁師の方が、「小長井の漁師も有明海の再生に対する思いは同じ」と言っていたことが本当によくわかりました。野田さんは「小長井の漁師は干拓事業が始まる前から、そして始まった後も、ずっと干拓事業の反対運動の先頭に立ってきた」と言っておられました。ただ、小長井は漁師だけの町ではなく、他の事業で生計を立てている人もおり（特に干拓事業で使う石材を扱う業者がとても多いそうです）、また、今では干拓関連工事に働きに出ている漁師もたくさんいます。大変複雑な社会環境の中で、諫早問題に関わっていることがよくわかりました。

小長井漁協を後にし、昼食は近くの料理屋（漁協組合長のお店だそうです。お店の方（組合長の奥さん？）からもたくさんお話をうかがいました）では、有明海を眺めながら、刺身定食や靴底（ヒラメのから揚げ）定食を食し、今回の見学会の感想を語り合った次第です。当初、高村さんに午後は佐賀県に入り、佐賀県有明水産振興センターを見学し、六角川河口等を見学する予定を立てていただいていたのですが、参加者の帰りの予定等を再度確認した結果、午後の予定が実施困難なことがわかり、ここで今回の見学会を終了することとなりました。大変充実した見学会となり、2日間の案内をしていただいた高村さんをはじめ、訪問先で本当に丁寧な対応をしていただいた方々に深く感謝いたします。

5. 少しの意見

諫早見学会が行われた2日前、24日に九州農政局の国営事業再評価（時のアセスメント）第三者委員会が熊本市で開かれた。見学会は諫早問題のピーク時に実施されたことになる。第三者委員会が「環境に配慮した条件付見直し」を答申し、「中止・休止」等の判断を農政局にゆだねたことは、諫早にいる時、テレビや新聞で知った。当事者でなく、しかも必ずしも専門的知識を深く持つわけではない者の感想ではあるが、やはり諫早干拓事業は計画当初から失敗であったと改めて思う。見学会に参加してみて、さらに強く思った。

干拓事業の目的にあった、農地造成については、日本の農業の現状を考えた場合、使うべきお金は別のところにあったことは明らかであろう。公共事業の優先順位が、地域住民のニーズからではなく、政治家や官僚、さらには事業につながる業者のニーズから決められていると思わざるを得ない。防災目的に関しては、長良川河口堰問題でも取り扱いの難しいテーマである。しかし、潮受け堤防や内部堤防を作らなければ、本当に洪水や高潮の被害から免れることはできないのだろうか、と考えてしまう。洪水に関しては、最大の対象地域であった諫早市街地が近年、対象地域からはずされている（もともと、市民グループからは諫早市街地の防災効果はないと批判されていた。建設省もそう言っていた）。潮受

け堤防などによって排水状況が改善されたり、高潮の恐れが軽減された地域も確実にあるだろうが、計画地域の設定が変わった中で、費用便益分析は今でも事業を支えているのだろうか。潮受け堤防とは別の手段はないのだろうか。あるはずである。

そして何よりも、干潟が消滅したことと、有明海全体の生態系が変わり、漁業が成り立たなくなってきたこととは明らかに関係があると思えてならない。水門開放に関しての意見は異なるものの、有明、小長井両漁協の漁師は、潮受け堤防の中央部を大きく開け、海水の出入りが自由になれば、諫早干拓地内の干潟は復活し、有明海の再生に向けて大きく歩き出すことができる、という意見で一致している（そして、口をそろえて干拓事業が海に影響を与えないと言い続けてきた、そして影響が出て、諫早干拓が理由ではないと言い続ける行政を批判した）。海が近くにありながら、海の幸に恵まれない状況は、自然の中で暮らし、自然の一部である人間にとって、あまりにも不自然だし、よいわけがない。正直な感想として、目の前に広大な海が広がりながら、漁船の浮かんでいない海は不気味でもある（もちろん、豊かな海であっても、漁船の浮かばない時間はあるのだろうけど。あと、有明海は思っていたほど大きな海ではなかった。だからこそ、人間による自然改変が海全体の生態系を破壊するのは簡単なようにも思えた）。

でも、こうした印象や感想で語っている限り、計算できるものしか計算しない、今の費用便益を前提とした公共事業の仕組みを変えることはできず、自然改変（破壊）の経済的費用が計測されない限り、様々な意味で事業から便益を受ける諸集団（政治家、官僚、建設業者等）の手から、海や川や山を取り戻すことはできないのだろう。諫早の海も長良川もやっぱり同じ構造の同じ問題を抱えている。

見学会が終わった翌日の8月28日、武部勤農水相は国営諫早湾干拓事業について、「事業の抜本的見直し」を表明した。しかし、同時に来年度予算の概算要求に本年度並みの要求額を盛り込む方針も明らかにしている。武部農水相は談話の中で「自然と共生する環境創造型の農業農村整備事業」の先駆的取り組みを（諫早で）したいと打ち上げた。具体的な見直し案は年末までにまとめる予定。「自然と共生する環境創造型事業」というフレーズは今、あらゆるところで聞くことができる。でも、この言葉には謙虚さが無い。人間の行為は必ず、自然を改変する、だからこそ、本当に必要なことをし、あったらいいね、といったレベルのものはしない、そうした価値観が入ってこない、あらゆる事業が環境創造型事業として、今後も認められ続けていくのではないか。諫早干拓事業をやめて、潮受け堤防を壊して、それで自然が回復し、ムツゴロウやトビハゼが干潟で跳ねるようになり、有明海の海一面に再び大漁旗がなびくようになれば、元気のない日本がものすごく活気づいて、日本人全部が元気になれる気がするのは私だけだろうか。

第3回世界水フォーラム円卓トーク
世界水会議副会長 コスグローブさん第3回世界水フォーラム事務局長
尾田栄章さんを囲んで

日時：2001年11月13日 19時～20時30分

会場：大津プリンスホテル・プリンスホール

ウィリアム・J・コスグローブ 世界水会議（WWC）副会長

尾田栄章 第3回世界水フォーラム事務局長

フランソワ・ゲルカン WWC 世界水行動報告書ユニットコーディネータ

中村玲子 ラムサールセンター事務局長（世界湖沼会議企画委員）

堤 幸一 湖沼会議市民ネット運営委員長（世界水フォーラム市民ネットワーク理事）

丹波道明 東近江水環境自治協議会会長

コーディネーター：奥野哲士 フリージャーナリスト

主催：滋賀県 共催：第3回世界水フォーラム事務局 後援：国土交通省近畿地方整備局

【「円卓トーク」レポート】 奥野哲士

2001年11月に開かれた第9回世界湖沼会議は、17年ぶりに同会議発祥の地・滋賀県大津市に里帰りしての開催となった。この会議のサイドプログラムのひとつとして開かれたのが「第3回世界水フォーラム円卓トーク」。

21世紀は、水問題が地球規模での最も深刻な問題になるといわれるなか、「第3回世界水フォーラム」は、2003年3月16日から23日までの8日間、滋賀、京都、大阪の3会場で開かれ、水資源問題から環境や自然災害などにわたる、広範な水問題について議論されることになる。フォーラム全体会議・分科会のほか、各国の水関係大臣による閣僚級会議、水に関するフェアなども開催される。

主催者側によると、フォーラムには8000人以上、フェアには15万人以上の参加が見込まれるというのだが、会議の知名度は、会場となる地元でも今ひとつなのが実状。そこで国内外から湖沼と環境問題の専門家や行政、NGOらが集まる世界湖沼会議の場を利用して滋賀県が、フォーラムのPRを兼ねて「円卓トーク」を企画した。

「世界水フォーラム」は、世界水会議（WWC:

World Water Council）の提唱で始まったもので、「円卓トーク」は、その世界水会議の副会長であるウィリアム・J・コスグローブ氏（元世界銀行副総裁）、NPO法人第3回世界水フォーラム事務局長の尾田栄章氏（元建設省河川局長）を囲んで、という形で開かれた。

ヴァーチャル・フォーラムは既にスタート

尾田氏の紹介によると、第3回フォーラムの理念は オープンな会議 参加する会議から、参加者自身が創る会議へ 議論から具体的な行動を実現する会議へ という3本柱を立て、インターネット上にヴァーチャル・フォーラムを立ち上げている。すでに600人以上がインターネット上の会議に参加しており、「水と気候変動」「水と食料・環境」「水とジェンダー」など43の会議が開かれている。2003年の本番のフォーラムまでにインターネット上で議論を続けていこうという試みである。

登録すれば、誰でも議論に参加できるほか、自分で新たな会議を主宰することもできる。また、会議の運営のあり方について「掲示板」に意見を出してもらうことで、ヴァーチャル・フォーラム全体の運営に影響を与えることもできる、という。

ところが、世界にはインターネットが使えない地

域もまだまだ多く、本当に深刻な水問題にさらされている地域の声がフォーラムに反映されにくいことから、「水の声」プロジェクトを企画、こうした人々の水に関する声を集める「水の声メッセンジャー」をボランティアとして募っているという。集められた声は、データベースに登録され、ヴァーチャル・フォーラムを通じ、様々なテーマの議論や、第3回フォーラムで発表される「水行動計画」に反映されることになる。

尾田氏は「例えば日本が輸入している大豆や小麦などを栽培するのに使われている水は、少な目に見積もっても50億トンになる。世界の水問題は、まさに日本の安全保障にも直結している」と強調した。

コスグローブ氏は、世界の水問題とNGOの役割という観点から話をし、「世界水フォーラムでは、どのように食糧安保を確保するのか、同時に農村の開発と環境の持続性をどのように確保するのか、必要な水のインフラを確保するための資金をどう調達するのか、など水について様々なことが議論されている。NGOの代表が必ずこうした問題の話し合いの中に参加していなければならない。第2回世界水フォーラム(オランダ・ハーグ)には多くのNGOや先住民などが参加したが、『世界水ビジョン』(世界の水の現状と25年後の姿を予測したもの)の作成に十分参加できなかった。次の第3回フォーラムは誰でも参加できるということだけでなく、参加者自身がフォーラムを創っていくものにしたい。そのことが透明性や説明責任を高めていく一助になる」として、フォーラムへの積極的な参加を求めた。

現場から遊離した「会議」に懸念

ここまでは、なかなか新趣向も凝らした魅力的な会議に聞こえていたが、出演したNGO・NPOの代表者から出た声は、意外に辛辣な内容であった。

中村玲子氏は「アジアの現場を歩いて、コップ一杯の水がないためにいのちを脅かされている人たちが本当にたくさんいることを感じる。本当に水を必要としている途上国の人たちは、パソコンも使えない、英語も話せない。そうした声をフォーラムに果たして本当に反映させることができるのか。説明をうかがっても、まだそこがはっきり見えない。一方、

このフォーラムを開催するために巨額のお金が動くのだと思う。そのお金で、地球上で困っている人たちがどれほど救えるかを考えたとき、やはり私にはまだフォーラムの意義がよく見えない。あと1年半の間に、そこが見えるようにしてほしい」と厳しい注文をつけた。

琵琶湖の内湖・西の湖近辺の住民組織である東近江水環境自治協議会は、西の湖自然観察会やヨシ文化懇話会、自然の田圃の感謝祭などの活動のほか、環境狂言「琵琶の湖(うみ)」公演などユニークな活動を展開している。その協議会の会長である丹波道明氏は「学者や行政の人は、現場に住む住民との懇談をもっと重視してほしい。現場を見て、そこに住む人と語り合うことで、雑多な情報を切り捨てた文字や数字の情報による議論だけでは得られない、異質で、貴重な体験をしていただけるに違いない。ヴァーチャル・フォーラムで議論するのは大事でしょう。しかし、そういうやり方は最後に報告書をまとめるときには非常に便利なんです。けど、その間に抜け落ちた色々な事実の中に、実は重要な情報が入っていやしないか。そこをもう一度、現場に行つて、現地の人とワーワーやりあう中で見つけることができるかもしれない」と、誰でも参加できるヴァーチャルな会議であろうと、結局は現場から遊離した議論になる危険性を指摘し、「河川の上流域で里山のエクスカージョンをし、山を守っている人たちとの対話を、中流域では自然な農法の稲作にこだわっている人たちと、下流域ではヨシ原や真珠母貝にこだわっている人たち、といった人々との対話を実施することを提案したい。もし、採用されるなら、私たちは下流域でのエクスカージョンの場として立候補したい」と、“雲の上”の「会議」を、自分たちの暮らしの場に引きずり降ろそうという具体的な提案で切り込んだ。

「エクスカージョン」を「分科会」に

また、子どもたちと山に入って森の木で手作りの打楽器をつくることを通じ、琵琶湖を守るためには水源を守ろうという意識を体で感じてもらい、手作り楽器で「湖童音楽祭」を開くなど、これまたユニークな活動をしている堤幸一氏は「第3回世界水フ

オーラムは、インターネットを使ったヴァーチャル会議という挑戦的なものが設けられているが、そのヴァーチャルがいかにか現場のリアルなものとなつていけるのかなあ、と。どの会議でもそうだが、この問題にぜひ挑戦してみたいと思っている。また、尾田さんが言われた『どう行動につなげていくか』という問題だが、例えば私たちが琵琶湖の問題を考えるのに、子どもと一緒に山で楽器を作ったようなことができないか。これは『エクスカーション・現地視察』ではなく、『分科会』ですよと、いろいろなことができないかと考えている」と、丹波氏と同様、ヴァーチャル・フォーラムに懐疑的反応を示しつつも、市民参加を謳った国際会議は、頼まれなくても自分たちが最初から参加し、創っていくことを前提として語っている。

「市民参加」を謳うには「覚悟」が

「国際会議にあなたたちも参加できますよ」という発想を、遙かに超えた意識と行動が、ローカルな

地域の市民のなかで、もう当たり前前に語られる時代になっている。インターネット会議などといった新趣向に惑わされない確かな目が、市民のなかにしつかりと根付いているのが印象的だった。

会場からも辛辣な意見が出た。インドからの参加者はこう言った。「私は第2回世界水フォーラムにも参加した。確かにハーグ宣言は素晴らしい内容だったが、あの会議で出たアクション・ユニットを各国が持ち帰って、どこまで行動に移しているか、はなはだ疑問。モニターはどうなっているんだ」と。

「住民参加」「市民参加」は、聞こえはいいが、これを謳ったとたん、主催者は相当の覚悟をしなければならなくなった。市民サイドは、いま、最も苦勞をし、鍛えられている層だからである。市民団体自身が、わずかな資金で、内容のある国際会議を切り盛りしている時代だ。今回の世界湖沼会議も、そういう集会の方に魅力のあるものがあつた。

新規加入会員案内

個人会員		敬称略
会員名	所 属	専門分野等
太田 正	作新学院大学地域開発学部	上下水道事業総合的水管理システム
和田 喜彦	札幌大学経済学部	
宮下 良太	全国大学生生活協同組合連合会 図書サービスセンター	
河内 俊英	久留米大学医学部生物学教室	環境問題・廃棄物問題
鎌田 さやか	近畿大学大学農学研究科	
阿部 直也	東京工業大学大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻	水源保護、政策評価、費用便益分析、LCA
高橋 卓也	滋賀県立大学環境科学部	資源・環境経済学、企業経営と環境対応

知り合いの方に是非、水資源・環境学会への入会をお勧めください。

学会事務局からの案内と連絡

2001年度の役員体制について

2001年7月の総会において板橋郁夫会長に替わって新たに菅原正孝会長が選出されました。板橋郁夫前会長はながらく学会の活動に尽力していただきましたが、創価大学を退職され、現職を退かれたのを機会に、学会の一線からも退かれました。同じく末石富太郎副会長も滋賀県立大学を退職されたのを機会に副会長から退かれました。

これらに伴い、新しい事務局長に仁連孝昭が総会で選出され、また新しい運営理事体制が理事会で承認されました。新しい運営理事体制は以下のようになりました。

- 研究企画担当理事： 秋山 道雄（滋賀県立大学）
伊藤 達也（金城学院大学）
西田 一雄（地域環境システム研究所）
畑 明朗（大阪市立大学）
若井 郁次郎（大阪産業大学）
- 編集担当理事： 小幡 範雄（立命館大学）
國松 孝男（滋賀県立大学）
高橋 卓也（滋賀県立大学）
千頭 聡（日本福祉大学）
土屋 正春（滋賀県立大学）
野村 克巳（京都市下水道局）
三輪 信哉（大阪学院大学）
- ホームページ担当理事： 花嶋 温子（大阪産業大学）
渡辺 紹裕（総合地球環境学研究所）
- 財務担当理事： 仁連 孝昭（滋賀県立大学）

原稿募集！

学会誌「水資源・環境研究」への投稿を募っております。次号の締め切りは**8月31日**です。投稿規定や執筆要領は学会誌の巻末にあります。投稿希望の方は裏面のエントリーシートを下記担当理事までお送りください。お問い合わせなども下記までご遠慮なく。

学会誌編集担当理事 千頭 聡

〒475-0012 愛知県半田市東生見町26-2 日本福祉大学情報社会科学部

電話0569-20-0112 FAX0569-20-0128 E-Mail chikami@handy.n-fukushi.ac.jp

電子メールアドレスをお知らせください！

電子メールによる情報提供やお知らせ等ができるように準備をしています。電子メールのアドレスを下記学会事務局まで電子メールにてお知らせください。

学会事務局 仁連孝昭

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500滋賀県立大学環境科学部 電話0749-28-8278 niren@ses.usp.ac.jp